
DEVIL-DEDICATE

さあ坊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DEVIL - DEDICATE

【NZコード】

N9213D

【作者名】

さあ坊

【あらすじ】

突如現れた謎の『悪魔』の名を持つロボット。そして謎の『少女』が放つ世界の理。謙虚に生きてきた福音莉音の前に現れた眞実が彼を運命の戦いへと導いていく…。

第一話　田舎の廃墟（前書き）

色々間違っているかと思いますが、初小説です。
見捨てないで読んでやってください。

第1話　日常の崩壊

田立たず^{に。}

それが俺のポリシーであり、絶対厳守の約束だった。何故なら俺は臆病で、謙虚に生きたいからである。

100点を取れるテストをわざと無難な点数にしたり、学年新記録を出せる100m走を遅く走り無難な中の上のタイムを出したりなるべく田立たなく生きてきた。

どうせ田立つたってろくなことがない。そんな奴は足下を掬われて惨めになるだけだ。

そうやってずっと俺は17年間そりやつて生き、今日も無難な日で終わり、明日も無難な日が始まると思っていた。

あんな事が起こる前は^{…。}

ざわめく教室内。今日は6月6日。初夏の日差しが教室へと降り注いでいる。あと数週間もすればうきぞりするような暑さが襲ってくるだろう。

クラスメートたちが3時間田のテストのこと話をしたり、昨日のテレビの内容を話している。

あまり興味がないので、顔を俯せて寝てるふりをする。こうしていれば誰も話し掛けっこみうまいとして助かっている。

俺の名前は福音莉音。^{ふくおと りおん}いつもこいつやって他人との関わりを遠くしている。たまに関わるときは謙虚に接するためか、当たり障りのないクラスメートとして扱われている。

今は2時間目が終わった休み時間。まだ学校が始まったばかりで少し眠気がする時間。

どうせいつものように先生が来て、いつものように授業をして、

いつものよつよつと帰り道を帰る。そしていつものように寝て、いつものような朝が来る。

単調。けれど高望みしてはいけない。そんなことをしたらたちまち足を拘わってしまうだけなのだ。ならば最初から謙虚に生きていけばいいだけのこと。

きつとそれが一番なのだ。人とは必要最低限に関わり、無難に謙虚に生きる。そうした方が良いのだ。絶対に。

そんなことを考えていると横に気配がある。考えるまでもない。あいつだ…。

「ねえ福音君、もうすぐ先生来るから起きていた方がいいよ

「……いつも寝ていなって知っているくせに

顔を上げれば、自分より頭ひとつ分小さい位の背に童顔で男子生徒が此方の様子をうかがっていた。

目は大きく、少し垂れている。髪は黒色でショートカット。腕も細く強く握ると折れてしまいそうである。頬は少しピンク色で、服を女性用にしても気にならないほど童顔だ。

コイツは毒島蠍。ぶすじま かづ何故が何かと俺につきまとうてくる。特に気にならないのであまり意識したこと無いが俺の中では親しい部類に入る。

「テストあるけど、勉強しなくていいの？」

「あー…別に。昨日のうちに勉強したし。まあいい点は望めなさそうだけど」

「じゃあ最後まで頑張らないと」

そう言いながら無邪気な笑顔をする。

本当... こいつ女じゃないか? と勘違いしそうだ。

「ふつ... どう頑張つても毎回試験学年一位の天才様には勝てませんよ」

「そんなこと言わずに諦めないでやれば福音君だつて良い点とれるつて」

「...人間高望みしない方が身のためなのぞ」

毒島は少し怪訝な顔をする。仕方がないだろ。謙虚に生きるのが俺のポリシーなのだから。

キーンゴーンカーンゴーン

「ほら、鐘なつたんだから席に戻りな」

「...」

背中を小さくしながら席へ戻る毒島は何だか寂しそうだった。しかし別段罪悪感もあまり生まれてこない。自分の信念を守つただけだと、そう感じた。

まもなくして教室のドアがあぐ。3時間目担当の先生が来た。

「ほら、席に着け。さつたとテスト始めるぞー」

クラスメートが愚痴をこぼしながら座り始める。全員座ったのを確認してから先生はテストをくぱり始めた。

内容を見れば、1分で出来るような簡単な問題ばかり。でも……。

また俺は100点を取れるテストを70点にした。

もつ絶対に……

やつと掴んだ

やつと見つけた

でももハピコオダ

でも

でも

だれも知らないこの旅は
いつともしれない無限回廊

終わりはどこ?

始まりはいつ?

少しづつ狂い始める

少しづつ回り始める

放課後

学校が終わるとすぐに帰るのが俺の日間だった。部活も入ってい
ないし、そもそも興味がない。家に帰つてゲームでもする方がよ
ほど有意義に思える。

下駄箱に行くと外には野球部がランニングをしているのが見える。
汗水たらして一生懸命に、一心不乱に。

そんなに熱中出来ることがあるなんて俺にはある意味羨ましかつ
た。努力しようとすることがない。何故なら努力する必要がないか
らである。

昔は努力していた記憶があるが、今となつては何ら必要ない。謙虚に生きるのに努力は無駄だから。

端から見ればつまらない人生かもしけない。でもそれが俺にとって最善の道であり、最良の行いに違いない。

靴を履き、外へ出る。まだ4時前後なのであたりは明るい。そのまま家に帰ろうとした矢先…。

「福音君ーー」

声がした方を見ると、毒島が手を振つて近づいてくる。

「何だ？俺はもう帰るんだが」

「いや…悪いんだけど頼みたいことがあって」

「頼みたいこと？」

「図書委員の仕事があるんだけど…相方が今日休みらしくて」

「ふんふんそれで？」

「…福音君が手伝ってくれたら凄く嬉しいんだけどなー」

上田遣いにトーンの高い声。きっとやうじう趣味の人気が見たら脇に抱えて連れて行かれるだろうと思つ。

とどのつまり、人手が足りないから手伝えとこいことなんだな。

「ねーお願ひー」

「わかつた、わかつたからその上目遣いをやめろ」

「？」

「こいつ…天然か。その笑顔も仕草も天然なのか。
まったく…どうやら今口はさつさと帰れなくなつたようだ。

「ありがとうね」

「いいつて。すぐに終わらせよつぜ」

俺はわざわざ履いた靴を脱ぎ、下駄箱へします。
案外お人好しなんだと自分で自覚しながらも、相手が毒島だから
だと言い聞かせた。

場所は変わつて図書室。

図書委員の仕事…もとい手伝いは古くなり、読まれなくなつた本
を移動させることだった。

一言に移動させると言っても数は多く大変な作業である。図書室
の奥から古びた本を重ねて準備室へと運ぶ。確かに毒島一人では出
来なかつただろう。こんな口に相方に休まれるなんて不幸なもんだ。

「福音君……多分それで最後だから……」

「わかったー」

毒島が準備室から顔を出して言つ。あいつは準備室に運んだ本を整理する係だ。

まあ見た目からして体力がない毒島にとつては適材処置だらう。

最後の本を重ねていく。ソクラテスの哲学本、フレミングの教本、日本文学大全集……。確かに人気が出なさそうな本ばかり並んでいる。

その中に気になる本が一冊あった。

「何だこの本?」

手にとつてしまじまじと見る。タイトルは……。

「『『七つの大罪』か……』

七つの大罪って言うと確かにキリスト教に出てくる用語だ。
興味本位で本を開けてみた。

「なになに?……七つの大罪は七つの罪源とも言い、罪そのものではなく人間を罪へと導く感情や欲望のことである。
七つの大罪は悪魔と関係し、一つの罪につき一つの悪魔が象徴される。

一つは傲慢の悪魔、ルシファー

一つは嫉妬の悪魔、レヴィアタン

一つは怠惰の悪魔、ベルフロゴール

一つは貪欲の悪魔、マモン

一つは暴食の悪魔、ベルゼビュー

一つは色欲の悪魔、アスモデウス

一つは憤怒の悪魔、サタン……ってあれ? この先は消えてるじゃないか

悪魔の名がだけが冒頭で書かれていて、その先は色褪せていて読めない。確かに古い本だから文字が見えなくなつて当然か。

「福音君? 何してるのでー? 早くね

「あ、悪い悪い」

すぐに本を閉じ、他の本を重ねて準備室へ持つて行く。これで俺の仕事は終わりだ。

「じゃあこれ整理してるから、福音君は先に帰つてていいよ

「せつか? じゃあまた明日」

「さよならー

待つてあげるとかそういうのを考えないで身支度をする。忘れ物が無いか確認してからさつわと図書室から出てしまった。腕時計を見ると針はすでに6時を過ぎようとしていた。

「結構遅くなつたな…すぐに帰ろ」

先程の本のこととはすでに忘れて、すぐに下駄箱に行くことにした。

その時、俺は外の景色が僅かに全んだのに気がつくことが出来なかつた。

やつと見つけたと思ったの

やつと違うんだと思ったの

何でタマノンゲだひつ

何で運命なのだひつ

早く

早く氣がついて

やつこなこと

限界

何だらうか。図書室を出てから周りの様子がおかしい
下駄箱に近づくたびにに広がる違和感。

言葉では表せない。独特的の雰囲気が漂つていいようだ。そう、何
かが変だ。まるで別の世界に飛び込んだような…。

疲れているのだろうか？いや違う。疲れていないわけではないが
そういう感覚ではない。他の、もっと他の感覚…。

…あまつ考えるのはよそい。すぐに帰つて晩ご飯を食べれば気に
ならなくなる。

下駄箱についた俺はすぐに靴を履き、外へ出る。まだ運動部が活
動をしているらしく、校庭内では大声が飛び交つている。

その姿みて、やはり俺は少し羨ましく思う。

次のバスが来るまであと何分だったか…。ふと腕時計を見る。

「今は… 6時6分… 6秒」

刹
那

周りの喧騒が消えた。

「…え？」

違う。周りの喧騒が消えたのではない。

周りの人間が消えたのだ。

つい先程まで張り切つて声を出していた野球部がない。素振りをしていたテニス部もない。筋トレをしていたバスケ部もない。まるで世界には自分一人しかいないような錯覚に陥りそうだ。
景色は変わらない。いや、一つだけおかしな物がある。

校庭には、一つの影。しかも巨大。今までこんなものはなかつた。どこにも存在していなかつた。

だが目の前には一つの巨大な影。校舎ほどありそうな巨大な影。まるで恐怖を振りまくように生まれた影。
何だこれは？夢でも見ているのか？疲れすぎて幻覚を見てるのか？ならば早く醒めろ。

(違うこれは現実だ)

影が話し掛けってきた。

現実なものか。そんなの認めない。認めたくない。

(何故わかる?…どうしてここが現実じゃないとわかるのだ?..)

影が話し掛けってきた。

だつてこんなことが現実なわけがない。現実であつてたまるものか!

(何が現実で何が空想なのかも知らないお前が)

影が話し掛けってきた。

違う違う違う…これは現実じゃないんだ

(ならば田をじらじら見てみるがいい)

影が話し掛けってきた。

そうすると、その影の実態が少しづつ見えてきた。

それは…

「あ…く…め…」

影は、じつと此方を見ていたのだ。

一つの赤い目で。

一つの角を携えて。

一本の腕について。

今すぐにもで掴まれて握りつぶされてしまいそうな存在感。

背を向けたら一気に引き裂かれそうな殺氣。

そして、体からあふれ出る恐怖。

まさにこれは悪魔ではないか。

「う…うわあああああああああああ…！」

自然に悲鳴が出た。これが夢でも幻覚でもないことがわかる。
何故だかは知らない。けれどこれは現実。

悪魔は、じつと此方を見ていたのだ。

第2話 悪魔と少女

666

そういえば666というのは悪魔の数字と聞いたことがある。確か時間を見たときは6時6分6秒。ああそうか。俺は悪魔に魅入られたんだな。

逃げられない。夢でも幻想でもないのなら、俺の人生はこれで終わるんだ。どうせだったらもう少し頑張るべきだったなあ。例えば良い成績を残したり、仲良く友人と過ごしたり、活発に部活に勤しんだり。

だが手遅れ。すでに終幕。もはやピリオド。

巨大な影は今でも此方を見つめている。ああ、もう終わりだ。

俺は目を閉じ走馬燈でも浮かべようとした。

しかし、そんな俺を引き留める声が上がった。

「うよー！何勝手にボーッとしてるのよー。」

声は悪魔から聞いた。さつき聞いたのは違つ声。
俺はおそるおそる目を開けてみた。

そこには少女がいた。

背は俺と同じくらいだろうか。女にしては高い。スタイルも良く、
一流のモデルだと言わても疑わないだろう。
格好は何故か黒いタイツに、首から手と足にかけて白いライン
が入っているという奇妙奇天烈な姿だ。

髪は白く腰まで伸びている。どうやって手入れをしたらあんな綺麗になるのだろう。

田は赤色。珍しい色だ。そして何より目立つたのは美しい顔だつた。

まるで人間ではなく美術品。一種の芸術ではないかと思い違つほどだった。そう、ミロの「ヴィーナス」が動き出した様に。モナリザのモデルが現れたかの様に。それに似た感銘を受けた。

少女はそんな俺を構わず、田の前に来て話しかけてくる。

「吃驚するのは仕方ないけど、説明してる暇はないの。わっわと乗るわよ」

「へ？」

少女は俺の腕を掴む。

そしてぐいぐいと悪魔へと引っ張つていった。
正直状況がよく分からなくなってきたぞ。

「の、の、乗るって何にさー?..」

「説明してる暇はないって言つてるだしそー! すぐアタマに乗るのみのアタマに乗るもの!」

少女が指さす方向には悪魔。
いや、そこに悪魔はいなかつた。

いたのは『悪魔』のよつな『ロボット』。

大きさはやはり校舎くらいか。しかし膝をついているので立てばもっと大きいだろう。

一本の細い角が天を目指してついている。

全体的に白でカラーリングされて、肩と顔の一部分に黒が散りばめられている。

目は少女と同じ赤色。ただこつちは見ているだけで足が竦むようだ。

人間でいう口には悪魔に相應しい牙の形をした装甲がついていた。

胸、腕、足にも何枚も装甲がついており、関節部分からはバネやらチューブやらが見え隠れする。

気になつたと言えば背中に背負つた一対の大剣。ファルシオンに似た幅が広い刃。鍔の部分が目玉の様な球体になつており、正直いって不気味だ。

そんなロボットが膝をついて待つているのだ。

「さあー急ぐわよー！」

「ちょ、待……うわああああーー！」

ロボットの手に無理矢理乗せられると、そのまま胸の高さまで持ち上げられる。

バシュツ……！

胸の部分が開いた。あそーが「コックピットだとすぐにわかった。

「も…もしかしてこれを俺に動かせとか言つたじゃ……」

「よく分かつたわね」

「…………いやだあああああ…!!…」きなりそんないと言われてもドキリしない…！」

「大丈夫よ、出来るもの。そつきまつていろ」

「この女、何を言い出すんだ？」

突然現れたと思ったたら今度は巨大口ボットを動かせだ？しかも出来ると決まっている？何を世迷い言を言つているのだ。

〔冗談ならよそでやつてくれよ！

「よそ見しないで乗るー。」

「ぐわっー。」

無理矢理、というより尻を蹴られてコックピットに入らされた。続けて少女も入つてくる。どうやらこれは二人乗りに出来ているらしい。

少女が乗ると同時にコックピットがしまつていぐ。

俺が下側のコックピット、少女が上側のコックピットに座る形になつた。

「コックピット内は座席の手すりの部分にレバーが一つ。足下には

足がちょうど入るような挿入部がある。

田の前には外の景色が広がっている。田の前だけじゃなく横、上、下、全面から外の風景が見えた。言うなればマジック//ラーみたいな物なのか。触ればちゃんと感触がある。

： つて冷静に周りの状況を言つている場合じゃなかつた…すぐに降りなければ！

「おい降ろしてくれよー。」

「駄目。これからは何回も乗るんだから文句言わないで」

「だから何を言つているんだよー。だいたい君は何者なんだよーーー。」

「私は…………ちつ、来た！」

少女は強制的に話を切る。

俺はついにキレそうになつた。

いい加減にしろと言おつとした瞬間、

ドカアアアツ！！

突然横からの衝撃が走つた。

あまりにも突然だったので、声を上げる暇もなかつた。

横を見れば、50m先にまたロボット。

今乗つているのとはまた違う。無機質な顔をしている。目は無く、
変わりに緑色の線が横に走っている。

平らな頭に突起物はない。変わりに天使の輪みたいな光輪が頭上
に光り輝いていた。腕はあるが手はなく、変わりに左手には剣、右
手には盾をつけている。胸から腰にかけては半円で、頂点には赤く
光るコアの様な物が見えた。足は通常一本の箸が一本しかない。

これが彼女の言った来たものなのだろうか。理解する前に少女は
叫ぶ。

「いいーこれからお前はコイツの操縦者になるーー！」

「だから何言つてるーそんなこと」

「出来るのーお前ならー」

「答えになつてなーうわあああー」

「あやあああああー」

一回目の衝撃。どうやら といつより確実にあの一本足ロボット
から攻撃を受けているのだ。

攻撃の余波でロボットが横倒れになる。勢いは無かつたがこの巨
体が倒れるのには大きな衝撃だった。

その衝撃で頭を打つ。痛い。痛すぎる。

何故俺がこんな目に遭わなければならぬのだ。俺はそんなに罪
深い人間だったのか？

そりゃ純白な人生じゃないだろうけど、これはあまりにも理不尽

だ。

「おこ！一休どうして俺が……」

彼女への文句は途中で切れた。

といつよつとの言葉は彼女に届かないのを理解したからだ。

彼女も頭を打っていた。

しかし俺よりも重傷らしく頭から血が流れ、右腕からも生々しい傷が見えていた。

先程の衝撃にしては大きすぎる怪我。

「あ、おい大丈夫か！？」

「あ……お前なら……出来るんだ……これを動かせる……」

この期に及んでもまだ言つのか。怪我をしているのに。
俺が動かせると思つていてるのか……？

根拠があるわけでもない。訓練を受けたわけでもない。
そんな俺に、本当に動かせると信じているのか。

「おい、何で俺が動かせると分かるんだ？」

「そう、決まって……いる……七……大……罪の一……」

「何……？」

「『傲慢』……」

その言葉を残して彼女は意識を手放した。

七？大罪？傲慢？最近その言葉を……？

考えようとした瞬間、また衝撃。

「つ……」

今度は悲鳴をあげる暇も無かつた。

相手のロボットは二つの間にか接近してきたのだ。

面前に迫る無機質な顔。

何を考えているのか、何をしようとしているのか。全て予想がつかない。初めての種類の恐怖。今まで生きてきて、感じたことのない殺氣。

一つだけ分かることは、振り上げた剣で俺を殺そつとしているという事実。

この時、俺は二度目の絶望を味わった。

今度こそ終わりだ。謎の少女に無理矢理謎のロボットに乗せられ
て、謎のロボットに殺される。

謎だけである。本当に。どうして。俺が。こんな

嫌だ。嫌だ嫌だ嫌だ。

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない。

死にたくない！！！

これから先は過酷な運命だけだ。それでも生きたいか。

ああ、死にたくない。

生きたいのか。

死にたくないか。
突如、頭の中に聞こえる声。
この声は俺が最初に聞いた声。トーンの低い男性の声。

今死んでしまったら意味がないだろう。

それに未来の不安に怯えていたら何も出来ないだろう……。

ならば、呼べ。

何を。

私の名を。

名前？

もう知っているはずだ。

そうか、お前は……

傲慢にその名を叫べ！――

「ルシファー！！」

剣が振り下ろされた。
そのロボットにもし感情があれば、勝利の悦が味わえただろう。
しかし、感情があつたとしても勝利の悦は味わえなかつた。

剣は途中で止まっている。
否、止められていた。

今まで身動き一つしなかつた相手が動き、間一髪で剣を左手で掴んでいたからである。

『 』

雄叫びとともに立ち上がる。

その姿はあるで悪魔
白き悪魔か真紅の瞳を光らせて今
現世に
降りてきたかのように。

蛇に睨まれた蛙、という表現が一番お似合いの状況だった。悪魔からしみ出す狂気の殺氣にロボットは動けなくなるほど恐怖を抱いた。

「いい加減にしろよおおおーーー貴様あーーー」

左手に握んだ剣を乱暴に振り回す。

自然僕は甲は云々といつてゐるので 口赤々させ振り回され

「でもあるものーー！」

勢いを殺さないまま地面へ叩きつける。その衝撃で校庭の砂が砂塵のように舞う。

一本足のロボットは一瞬何が起きたのか理解が出来なかつた。ひとまず立たなければと立ち上がろうとする。

しかし、立ち上がりがない。

白き悪魔が足で力任せに押しつぶしてゐるのだ。

「お前なんかに！この俺が！負けるかよ！……」

ガン！ガン！ガン！ガン！

何度も何度も踏みつける。中に入っていたら、とっくに死んでしまいそうな衝撃。

ガン！ガン！ガン！ガン！

さらに踏みつける。すでに装甲は無惨にも曲がり、剣は折れ、盾はその役目を果たせずに朽ちていった。

何度も踏みつけるので地面は揺れ、側にあつた木々は全て倒れ、校舎もビシリシと音を立ててひびが入つている。

誰もが見ても勝敗は明か。勝負は終わっている。

それでも破壊衝動は收まらないのか、ついに背中の大剣の一つを抜く。禍禍しく、見たもの全部を破壊しないと止まらない殺意。自分だけが生き残ると象徴されている魂の塊。その大剣を左手だけで天高く振り上げる。

「消えろおお！……」

力の限り、もてる全てを出して、
剣は振り下ろされた。

一刀両断。

まさにその言葉が意味する通り、ロボットは大地ごと真つ二つに
切り裂かれた。

バチバチと音を立てる断面。生き物の様に痙攣する手。無惨過ぎ
る光景。

観客はただ一人、白き悪魔。

白き悪魔は後ろを向いてそのまま大剣を納刀する。
瞬間、白き悪魔の後ろで爆発が起こった。

白き悪魔は勝利の悦にも酔わず、歡喜の悦にも酔わず、ただ真紅

の目を光らせていた。

俺は気がつくと校庭に俯せに倒れていた。

相変わらず周りにはいない。ちらつと見えた時計だとすでに7時を回っていた。

いや、周りに人はいなは嘘だ。

数m先にあの少女が倒れていた。身動きせず、俯せに倒れている。その周りに赤い水たまり。あれは全て血だとすぐに分かった。あれだけの量だ。命に危険が及ぶのは目に見えている。

早く助けないと。でも体が動かない。首から下は全く持つて機能していない。

クソッ！動け動け動け！

思いに反し体は1ミリも動かない。

何でだよ！今動かないと彼女が死んでしまうだろ！何故動かないんだよ！！

必死に動こうとしても動かない。

しまいには意識も朦朧とし始めた。

チクショウ、早く動かないと…。

彼女が死んでしまう。
はやく。

ついに俺は意識を失ってしまった。

第3話 現実と狹間

物事には順序といつものがある。

これは世界の摂理であり、唯一の真実。

しかし時と場合により、この摂理は消えてしまつ。
そう、悪魔の手によつて。

暗い視界。

これは周りが暗いのではない。自分が目を閉じているからだ。ゆっくりと目を開ける。眩しい光が直接視界に入り込んできた。

しばらくして、目が慣れてきた。

白い天井。あまり見覚えがない。目を開いたことで自分がどういう状態なのか分かった。

ここは病院なのだ。質素なベッドと固い枕。どうやら一応一人部屋のようで、ベッドの隣の台には花が飾つてある。周囲には誰もない。

窓は空いていて生暖かい風が入つてくる。外はすでに暗くなつていて、暗黒の中に月光が降り注いで仄かに明るい。

起きようと思つて手をつく。結構な時間を眠つていたのか、なかなか力が出ない。やつとの事で起き上がりナースコールを押す。

とりあえず今の状況を整理しなければ。

学校は？一本足のロボットは？俺が乗ったロボットは？そして、あの少女は？

思い出しそうで、思い出せない。

一本足に殺されそうになつた後の記憶が曖昧だ。俺じゃないみた
いな感覚が舞い降りてきて…。駄目だ。思い出せそうにない。

思い出す前に、若い看護婦が来た。

「気分はどうですか？」

「少し頭が…俺はいつたいどうしてここに？」

「あなた、校庭で倒れていたらしいわ。部活動をしている生徒に発見されたらしいけど」

倒れていたのは覚えている。だがおかしい。

あの時周りには人がいなくなつていたはずだ。誰一人。俺と彼女以外。

だとするとやっぱり幻覚だったのか。はあ…。我ながら変な夢を見たものだ。

そうだ。あんな事が現実な訳なかつたんだ。自然に自嘲が出てくる。

「あら、どうしたの？」

「いや、変な夢を見ていたらしくて。でも夢で良かつた。死ぬかと

思つたほどですから

「やうね。夢だけで済むなら良い事よね」

「の看護婦さん。過去に何かあったのだろうか…。
深く詮索しない方が良いだろう。

看護婦さんは俺の脈を測つたり、気分はどうつかと聞こてきたりした。

俺の思つていた以上に体は異常なく、大きな怪我もないらしい。

「特に頭に異常も見られなかつたし、きっと明日になれば退院出来ると思つ」

「わかりました」

「じやあ安静に寝ていてね

そう言つて残し、後ろ手でドアを閉めて出て行つた。

俺はまたベッドに寝こんで腕を枕にする。枕が固いからだ。

あれが夢だと分かればもう怖がることもない。やつ
と俺は疲れていたのだ。そつに違いない。だからあんな夢を見てしまつたんだ。

馬鹿だなあ俺。阿呆だなあ俺。現実なわけないじゃんか。

何を勘違いしていたんだ。リアルな夢。そんなこともあるじゃないか。明日からはまたいつもの日常。いつも通りの一日を過ぐるんだ。

「あー夢でよかつたー」

「夢じゃないぞ。福音莉音」

○

今、俺以外の声が聞こえなかつたか？
いやいやそんなはずは。この部屋には俺以外誰もいなはずだ。
でも聞き覚えのある声。そうこれは……。

「あの時のおおおおおお！」

「やつと気がついたか」

声がした方向 正確には窓の方を見て仰天する。
その『彼女』は窓の外側から上半身を乗り出していた。

吸い込ませそうな赤い目。印象的な白い髪。風になびいて白色の線が踊る。

そして何より黒いタイツ もしかしたらパイロットスーツの類なのか が目立つている。

赤白黒。この三色が絶妙な色合いで美麗を醸し出している。

先程と違うとすれば額に痛々しく巻かれた包帯だらうか。それでも彼女の美しさに変わりはないのだが。

「やつと見つけたぞ。見つけたと思つたらこいつの間にか車で移動させられてしまつていたし。また探すのに苦労した」

「な、な、な、な、な」

「夢ではなかつた。それは彼女自身が証明してしまつてゐる。…あまり信じくなかったが。

とにかく彼女がいるといつゝとはあのロボットも…現実だらう。

「どうした? 何か言え。それとも私のあまりの美しさを見とれて、声もでないのか。そつかそつか」

勝手に解釈してうんうんと頷いてゐる。凄くむかつぐ。どうやら彼女はプライドが高いと見える。

「ほれほれ、遠慮せずに世辞を言つがいい。むしろ言え」

：前言撤回。彼女は物凄―――くプライドが高い。確実に。最初会つたときもそうだったが、彼女は見た目に反して性格は最悪、と思つた。

さて、ずっとむかついている場合でもない。今の内に疑問を答えてもらおう。とこりかしてもらわないと気が済まない。

「どうじよひか。色々聞きたいことはあるけど、どれを最初に聞こうか迷ひ。

「どうじつ状況で？あの悪魔は？あのロボットは？そして…。

「スペリビア」

「え？」

「私の名前だ。私は何者かと聞いただろ？答えられる状況ではなかつたから、今」

そういう彼女の　スペリビアの笑顔に俺は今度は本当に見とれてしまつた。

「聞きたいことは多いだろ？この私が優しく教えてやる。どうだ、嬉しいか？」

「俺はまた前言撤回をした。

窓から乗り出している人と話すのも変なのでとりあえず彼女を部屋に入れる。

スペリビアを椅子に座らせ、俺はベッドに座って話をする。

「そうだな。とりあえず君の名前は分かつた。じゃあスペリビア、君は人間？あの俺が乗ったロボットは？戦つた一本足のロボットは？そしてあれらは何なんだ？」

「まじまじまじ。いくら私が質問して良いと言つたが、そんな一気に聞かれても困る。一つずつ聞け」

命令口調なのがあまり気に食わないが致し方がない。
とりあえず一番知りたいことを聞いた。

「スペリビア、君は人間…なのか？」

「違う。私は悪魔だ」

「は？」

悪魔？こんな可愛らしい娘が？むしろ小悪魔的と言つた方が納得できる。

「疑つていろな。だけど今疑つても仕方がないぞ。これが眞実なの

だから「

自信満々な表情だ。むしろ清々しい位勝ち誇っている。
まあ…あんな事の後じゃ信じるしかない、か。

「…じゃああの俺がロボットっていつたい何だ」

「名前はもう知ってるはずだ」

「…ルシファー」

「そうだ。ルシファー。声を聞いただろ?」

そう言えば最初に聞いた声があった。
あれがルシファーの声なのか…? ?

「まあこの事は後で詳しく話すとしよう。それを説明するにはまだ話さなければならぬことがある」

「何だ」

「…」
「…」
「？」

突然妙に真剣な顔になつてスペリビアは話し始めた。

「INの空間には二つの世界があるのだ」

いきなり現実味のない話な気がする。いや、最初から現実味がないんだが。

一応口をはさまず聞いてみる。

「まずは人間界。お前の世界だ。もう一つは悪魔界。私の世界でもある。さらにもう一つは天使界。その世界の名の通り人間、悪魔、天使がその世界に住んでいる」

あまり実感がわかない。といつより信じられないと言つた方が的確だった。

彼女のことばは悪魔と信じているとしよう。だけど世界が合計3つもあるなんてナンセンスな話にしか聞こえない。

それに天使と悪魔の世界があるなんて到底想像できない。それでも彼女は真剣そうな顔で続ける。

「「」の三つの世界には順位があつて、最下位は人間界。上位に悪魔界。それに並んで天使界。「」の三つの世界は三角形に成り立つている。

「こまではわかつたな？」

「う、うん」

曖昧な返事をする。聞いてはいるのだが理解は出来ない。

あまりにも唐突、想定の範囲外だったのでいまいち理解不能だ。

「」の世界はお互い繋がつていて、お互い干渉することも無かつた。まあ、人間にいたっては存在さえ知られていないんだがな」

その存在、今俺が知つてしまつたんですけど。

「だが…創聖歴15200年、人間で言うと2000年前に悪魔界へ天使界の奴等が攻め込んできたのだ。無論悪魔界もこれに反発し、争いが起きた。そしてそれは今も続いている…」

「それってつまり2000年間も戦争を続けているって事なのか！？どれだけ長い間戦っているんだよ…」

「長さの問題ではない！彼奴等は…天使共は…！！我らの同胞を…！」

突然スペリビアは声を荒げる。

顔はまさに怒りの形相で、口はつり上がりっていた。

その様子に俺は恐怖した。

スペリビアはあはあと息を整える。

「…すまない、取り乱した」

「い、いやいいんだ。話を続けてくれ」

俺はもうこの話のこと信じ始めていた。

きっと最初から信じていた。ただ物事を理解できないだけで。

それは彼女の怒りから感じ取れた。芝居でもあんな見幕は出来ない。

つまり、彼女が『う』とは『本当』のこと。

「…私たち悪魔は窮地に立たされている。悪魔界が攻め落とされるのも時間の問題だろう。だから私はここに来た」

「人間界に来たって事だよな…。でも何故？悪魔界つてのがピンチなら人間界に来ている暇なんてないだろ」

「ちゃんとした理由がある。何故ならルシファーの真の力は人間にしか出せないので」

「へえー…って何でだよ！あればお前等悪魔のものなんじゃないのか！？」

「そうなのだが、アレは私たちの世代が創った物ではない。私の生まれる前…もしかしたら世界が生まれる前…」

「ちゅちゅちゅちゅつと待て。スペリビア、君はいったい何歳だ」

「人間でいうと2116歳位だと思うが…って何レディに年齢を聞いている！失礼ではないか！」

2116歳。

つまり俺は金さん銀さんの200倍生きている悪魔と話しているわけだ。はは。面白い、面白いな。

って冗談きつすぎる！俺と全然変わらないように見えるのに！

「まったく…話を続けるぞ。元タルシファーは伝説上…『七つの大罪』に出てくる悪魔で、実際には存在しないと言っていたんだ」

「でも、アレがルシファーなんだろ？」

「ああ、伝説は本当だつたんだ。私にも理解しがたいが、実際にあつた…というより現れたんだ。私の前に」

「現れたって…どういう意味だよ」

「そのままの意味だ。私も選ばれた適性者だからな。ルシファーは語りかけてきた。『我的力を欲すれば下層の手を借りよ』と。つまりルシファーの真の力は人間がないと出せない、というわけだ。だから悪魔軍は私とルシファーを人間界に送り込んだんだ。天使達の戦いに勝つために」

その適性者が俺で、ある意味（嫌な意味で）選ばれてしまったのか。

「もちろん『七つの大罪』という名の通り、あれ以外にも後6体存在する。今どこにいるのかは知らないがな」

「ええ！？あんなのがあと6体もいるのかよ！…ん？でも待てよ。今どこにいるのかは知らないって言つたよな。何でだ？」

「お前も見ただろう。悪趣味な一歩足を」

悪趣味かどうかは別として、一本足と言うとあの相手だった口ボツトのことだろう。

「あいつは天使軍の無人戦闘兵器、通称インフォリオエンジエルスと呼ばれている下級戦士だ。人間界に転送する時、彼奴等が襲ってきた。だから本当は一ヶ所に転送する筈だったのに、彼奴等の攻撃でバラバラに飛ばされちゃつたって訳」

「へえ…じゃあ君は今までずっと一人で、俺を捜していったつてわけかよ」

「別に一人ではない。ルシファーもいたし」

「そういう意味じゃなくって…そういうえばアレは今どこにあるんだ？まさか学校に置きっぱなし何てことは…」

「そんな馬鹿なわけがないだろつ。決して見つからぬ場所にあるんだよ、今は」

決して見つからない、というのは引っかかったが絶対の自信がある言い方だった。

「…さて、質問には一応全て答えたと思つが？」

彼女は細めになり髪を触る。
その仕草がちょっと可愛く見えた。

「整理をすると君は悪魔で、君の世界が天使に襲われていて、七つの大罪に出てくる悪魔を戦いに使うために人間界に来て、俺がその適性者だと」

「そうやつ、漸く理解してくれたか」

「何も説明せずにあんなのに乗せたのは君だろー？それにまだ…」

「信じられない、か？でもお前は知ってしまった。信じるしかないんだよ」

確かにあれは現実で、彼女も悪魔なんだろうと思う。

でも今まで生きてきたアイデンティティを一日にして崩された気

分で、正直いい気持ちではない。

「で、協力してくれるな？」

スペリビアが顔を近づけて聞いてきた。

至近距離。鼻の頭がくつつきそのまままで接近していく。

「ちょ、近い近いって！」

「もちろん協力してくれなければ此方にも考えがある。例えば死んだ後も業火に焼かれるようになるとか」

「脅迫じゃないか！」

「手段を選んではいられない。もう貴様は知つてしまつたんだ」

知つてしまつたつて、君がむりやり引き込んだ様なものだらう…まあ…境遇を知つて可哀想だとは思つたけど、自分が手伝う理由も義理もない。

そもそも俺が彼女に手を貸して何になる？むしろ損の方がが多いじゃないか。ただ人並みの生活を生きていきたいだけなのに、何故こんな状況になつてしまつてしているのだろう

どんどん、腹が立つてきた。

「さあ」

「君の言つた」とは分かつた。君の世界が危険になつてているのも分かつた。でもそれに協力するかは別だ！俺は普通に生きていきたいんだよ！！

スペリビアの言葉を遮り、大声をあげてしまう。

彼女は心底驚いた顔をしていた。

でも俺は頭に血が上っていて、そんなことは気にもしなかった。

「大体どうして俺なんだよ！！あんな怖い目にあって、それでまた怖い目にあえつてか！！冗談じゃない。何の嫌がらせだよ！俺は普通に、無難な生活を送りたいだけなのに！！どうしてそれをぶつ壊す様な真似をする！俺には関係ない。君も関係ない！！

俺はもうあんなのには乗りたくないんだ！！！」

今度は俺が息を乱してしまう。

頭によみがえる恐怖感。迫り来る狂氣。死ぬという絶望感。

その全てが俺を怒りへ導いた。

そういうた好意が彼女を傷つけると分かっていながらも

「……」

スペリビアは何も言わず、ただ悲しそうな顔で此方を見ていた。

彼女の顔を見て俺は正気に戻る。いくら何でも言ひ過ぎた。彼女は俺を　俺一人を頼ってきたのに。

「あ、ごめ

「いや、いくら何でも無理な頼みだった。すまない」

謝罪の言葉を遮り、スペリビアは窓へ立つ。

「そりだよな。お前のような無関係の人間を巻き込むことと自体間違っているよな」

顔を外へ向けてるので彼女がどんな顔をしているのかは見えない。

だけど声は元気が無く、泣いている声に似ていた。

「お、おこどり行くんだよ」

「どり」という当てもない。お前以外の適性者を探す。迷惑をかけたな

今にも窓から出て行こうとする彼女を俺は止めようとしたが、出来ない。

止めたいたが、今の俺には止められないと感じたからだ。

「…もし」

「？」

「もし少しでも協力するといつ気持ちがあつたら、明日の6時6分6秒にあの学校に来てくれ。…まあ、無理は言わない。忘れてもいい

スペリビアが目だけを此方に見せる。その目は 潤んでいるようになつた。

すぐにまた外へ向き、そのまま飛び降りてしまった。

「あ、おー！」

制止する声もすでに届かない。すぐに俺は窓の外へと身を乗り出したが、周りに人影どころか、気配さえ感じない。

俺が…。

俺が彼女を泣かしたのか…？

そうだろう。だつて俺が彼女を否定したのだから。

でも、俺だって死にたくない。怖い目にあいたくないんだ。いいんだ。これで元の日常に戻るだけ。気にすることはない。もう俺には関係ない。

俺は布団を深く被つて、自分に言い聞かせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9213d/>

DEVIL-DEDICATE

2010年10月17日02時59分発行